

総論に代えて

# モンゴル帝国Ⅱ元朝の覇権から見た一三〜一四世紀の諸相

四日市 康博

## はじめに

一三世紀にモンゴル帝国が出現して東西ユーラシアにまがる大帝国を形成した際、東西ユーラシアの各地域に大なインパクトを与えたことには論を俟たないであろう。来、モンゴルのインパクトというと軍事的なインパクトが強調される傾向があり、また、その反面、「モンゴの平和」(バクス・モンゴリカ)として東西交通の安定交流の活性化も取り上げられたが、両者の関連について及されることは少なかった。しかし、近年、モンゴルのインパクトを短期的インパクト・長期的インパクトの両面から捉え、両者の関係を表裏一体のメカニズムとして理解しようとする動きが見られつつある。

史苑(第七九卷第二号)

## 二 元朝の海上貿易と一三〜一四世紀

元朝と日本の交易は二度の戦役にも関わらず、一四世紀にピークを迎えるが、それは決して海域アジアの海上貿易の主流ではなかった。一三〜一四世紀の海域アジアにおいて主軸となる海上貿易路は福建地方の泉州から南下してチャンパー(現ベトナム中南部)、マラッカ海峡、スマトラ島北端のラムリーを経由してインド洋に出るいわゆる「西洋航路」であった。これに対して、台湾からフィリピン諸島を南下してボルネオ島、マラッカ海峡、ラムリーを経由してインド洋に出るいわゆる「東洋航路」は一三世紀にも既に使用されていたものの、本格的な海上交易幹線として機能するようになるのは、一五世紀以後である。東

洋航路は琉球とも繋がっていたが<sup>①</sup>、琉球王国と東南アジアが海上貿易路で結びついたのも琉球王国の成立した一五世紀以後である。ましてや、琉球の先にもあり、東洋航路から見て支線に過ぎない日本は一三〜一四世紀の段階では東南アジアと直接貿易ルートを確保しておらず、(対馬や済州島経由のルートも含む)一部の高麗との貿易ルートも存在はしていたものの<sup>②</sup>、中国との貿易ルートだけが海外貿易路であった。日本と中国の貿易ルートは日本側では博多と慶元(明州、寧波)を結ぶ大洋路と沖繩と福建を結ぶ南洋路が認識されていたが<sup>③</sup>、それらは東洋航路・西洋航路から成る南海航路に直結するものではなかったのである。南海航路の主要貿易品として東南アジアからイスラーム圏まで広く流通していた徳化窯白瓷が日本はおろか琉球でもほぼ全く出土しないこともそれを裏付ける。

上述の意味では、元朝と日本の貿易は必ずしも一三〜一四世紀の南海貿易の一般的な範疇に入るわけではなく、むしろ個別特殊なケースにあたると言ってもよい。例えば、榎本渉は元朝でも東南アジアからの使節往来が盛んで海上貿易も隆盛していたと見られる世祖フビライ朝の日本と元朝間の貿易に対して、むしろ貿易が停滞していた時期との評価を下している<sup>④</sup>。当然ながら、これには日元間の二度にわたる戦役が影響しているわけであるが、それでも全く貿

易関係が断絶してしまったわけではなく、各戦役が終わると比較的早い段階で貿易が再開されていたことが指摘されている<sup>⑤</sup>。そして、その後、一四世紀を迎えると日本と元朝の海上貿易は絶頂期を迎えるのである<sup>⑥</sup>。これは、日本に限らず、ベトナムやチャンパ、ジャワでも見られた現象であった。元朝と戦争をおこなったにも関わらず、その後の貿易関係がより拡大したのである。政権同士が国交を断絶していた日本と違って、ベトナム(陳朝)、チャンパ(ヴィジャヤ朝)、ジャワ(マジャパイト朝)は戦後すぐに朝貢を再開して関係を修復しているから、貿易関係が拡大したのも当然といえば当然かもしれない。ただし、上述の東南アジア諸国と元朝の貿易関係の詳細はよくわからない。史料上には、貿易の内容を示す記述はほぼ皆無である。これに対して、日本側の寺社や幕府・朝廷に日元貿易に関する記録が断片的ながら残っている。これによって、日本と元朝の間の貿易がどのような形態であったのか、日本側の寺社や権門はどのように貿易に関わっていたのか、かろうじて知ることができる。加えて、韓国の新安沖海底から出土した新安沖沈船遺跡は実際の積み荷や乗組員に関する直接的な情報を数多くもたらした。これらの資料状況に基づいて日元貿易の研究は他地域に類を見ない進展を見せている。少なくとも、日本側からどのような形態で貿易資本が出資さ

れ、貿易がおこなわれたのか議論がおこなわれてきた。そのなかで最新の研究成果となるのが、本誌に掲載されている高銀美論文である。日本史研究者が主導してきた日元貿易研究において、高銀美は元朝側の一般的な海上貿易管理体制を提示した上で、日本と元朝の貿易の性質について論じている。そして、それは不朝国（不臣之国）である日本と王族に名を連ねる高麗を対比することによって、一層、日元貿易の性格を際立たせることに成功したと言つてよいであろう。

先に、日元貿易は南海貿易の一般的な範疇には入らないと書いたが、日元貿易が南海貿易と全く共通点が無いわけではない。むしろ、元朝の市舶政策上、共通する部分も多かったと考えられる。例えば、貿易の担い手として「綱」と呼ばれる商業組織が関わっていた点や寺社など宗教教団の資本が交易に関わっていた点は他の地域でも類例が見られ、具体的な様相が明らかではない海域アジアでの貿易活動を<sup>⑧</sup>知る上で、日元貿易の事例が重要な手掛かりとなるだろう。

一方で、高銀美は「中国との貿易は日本を起点とした。パターンが一般化し、中国から日本を訪れる貿易船は殆どなかった」と述べているが、この点はなお慎重な検討が必要である。確かに日元貿易に対して元朝側からの資本投下が

おこなわれたことを直接示す史料は見られない。しかし、元朝側の商人の資本参加を示す手掛かりがないわけではない。例えば、「綱」の存在である。「綱」はもともと中国において政府の需要に関わる官物の運輸を請け負う組織であり、その一部門として海上貿易を請け負う組織が存在していた。<sup>⑨</sup>ただし、ここに挙げた「綱」の定義と機能は唐代から北宋代にかけてのものであり、南宋・元代に海上貿易に従事していた綱が同様に官貿易に従事していたのか定かではない。しかしながら、「綱」という名称自体、中国を拠点としていたことを示しており、「綱」の墨書を持つ陶磁器・木簡が日本のみならず韓国・台湾・フィリピンなどからも出土している。<sup>⑩</sup>

このように考えると、日元貿易は「日本から中国」という一方的な関係のみで捉えるのではなく、「中国から日本」という方向も含めた双方向的な関係として捉える必要があるだろう。従来の日元貿易研究は日本側からの資本の流れにしか注目されてこなかったが、元朝から日本への資本の流れにも目を向けることによって、より大きな枠組みから日元貿易の位置づけを明らかにすることができる<sup>⑪</sup>と考えられる。

### 三 海域アジア・ユーラシアをめぐる中国陶瓷

一三〇一―一四世紀は、中国陶瓷が海域アジア・ユーラシア世界全域に流通した第二のピークと言える時代である。第一のピークとして唐代後半の越窯青瓷や邢窯白瓷河南系の白瓷、長沙窯彩色瓷などの輸出の興隆が挙げられるが、その後、一一世紀から一二世紀前半にかけて輸出された白瓷に代わり、一二世紀末以降、龍泉窯青瓷の輸出が主流となった。その傾向は東アジア海域のみにとどまらず、東南アジアからインド洋、ペルシヤ湾、紅海まで同様の傾向が見られる。その意味では、この時代を「龍泉窯青瓷の時代」と呼ぶことができる。貿易路としては主要な幹線から外れる日本における中国陶瓷の出土状況は、東南アジアからインド洋にかけて主要な輸出品となっていた徳化窯白瓷が流通しなかったことや元青花瓷器の流通にやや時間差があることなど、必ずしも南海貿易と同様の傾向を示すわけではないが、それでも大局的には「龍泉窯青瓷の時代」を迎えたことに違いは無い。また、この「龍泉窯青瓷の時代」にはオリジナルの生産元である龍泉の周辺地域、特に浙江地方と隣接する福建地方の沿海や閩江流域の窯において龍泉窯青瓷や景德鎮窯白瓷の模倣品が多く生産され、それらもまた海外貿易ルートにのって輸出された。いわゆる「ピロー

スクゥタイプ」や「今帰仁タイプ」と呼ばれる閩清窯(義窯など)・莆田窯(莊辺窯)・連江窯(浦口窯)・南平窯(茶洋窯)などの製品である。近年、これらの窯製品の編年研究も進められ、一三〇一―一四世紀の陶磁器流通ルートの特定において重要な指標となっている。

本特集の徳留論考は陶磁出土状況について最新の情報まで勘案した上で、海域アジアの陶磁器流通を俯瞰し、その上で一三〇一―一四世紀、特に元代中期―後期にあたる一四世紀に陶磁器流通の増加や新たな様式の出現などが見られることから画期となり得ると結論する。これはモノの流通や貿易を考える上で、非常に説得力があり、示唆に富んだ見解である。この徳留論考の結論はこれに先立つ森本朝子による東南アジアにおける中国陶磁の出土状況から導かれた流通の増加が一三〇一―一四世紀にあったとする考察や、筆者が数年来、陶磁研究者の森達也、イラン史学者のアリー・パフラニールと共におこなっているペルシヤ湾岸から内陸部にかけてのキャラバンルートにおける中国陶磁の流通状況とも符合する。

では、かかる状況はどのような条件下に成立したのであるろうか。元代における龍泉窯青瓷の流通拡大はひとつには民間貿易の拡大を背景とするが、それだけでなく、官営貿易との関係も起因のひとつとして挙げられる。浮梁磁局の

置かれた景德鎮窯と違って龍泉窯に生産を統制する官衙が置かれたという記録は残っていないが、明代の官窯と見られる龍泉大窯では元代から生産がおこなわれていたことが確認されている。元代の景德鎮には浮梁局が置かれ、官衙による生産管理がおこなわれていたことが知られる。元代にはこの景德鎮で青花瓷器が生み出され、以後の大量輸出の先駆けとなった。青花瓷器の誕生に欠かせないのは青の発色をもたらすコバルト顔料であったが、特に西方からもたらされたものは「回回青」と呼ばれて珍重された。元代には龍泉窯、景德鎮窯、磁州窯などの大規模窯群のブランド化と地方の小規模窯の倣ブランド化が進み、それが海外輸出にも反映されたと言われる。それら大規模窯群のブランド化の背景には当然ながら官窯として元朝が採用し、宮廷文化・官僚文化の一部として取り込まれたことも大きく影響していたと考えられる。官窯としての政権との繋がり は当然ながら宋代にも存在したが、元代はそれが海外輸出と結びついたところに特徴がある。それは次の明朝にも継承された。

かかる状況は、商人たちの海上交易活動、特に漢人・ムスリムのディアスポラと密接に関連する。宋代以降、「綱」と呼ばれる官営貿易を請け負う商人集団が海域アジア全域に展開して貿易活動をおこなったが、規模は異なるもの

元代にも継続していた。これらは海域アジア各地に形成された漢人コミュニティと密接な関係を有していたと見られる。少なくとも、日本の場合は、博多に形成された「唐坊」と呼ばれるコミュニティが海上貿易の拠点となっていた。同様の例は、例えば、インドネシアのメダン近郊にあるコタ・チナ遺跡でも見られる。この遺跡からは一三〜一四世紀を中心として唐代から清代までの中国陶磁器や中国銅銭が出土しており、文献資料には具体的な記述は見えないものの、その「コタ・チナ」Kota Cina（中国人の町）という呼称が表すように貿易の拠点となる漢人コミュニティであったと見られている。もちろん、これら各地の漢人コミュニティと海上貿易の関係を単列に置くことはできず、各コミュニティによって貿易との関わり方には差異があった可能性もある。例えば、博多と那覇では出土する陶磁器の種類や組成が異なることから、浙江の慶元（現寧波）―博多と福建の福州・泉州―那覇のルートでは担い手となる商人の構成も異なっていた可能性が高い。単純に考えると、博多には浙江商人、那覇には福建商人が通交していた可能性があるが、寧波や杭州など浙江地方にもかなりの数の福建商人が貿易に従事して対日貿易に関わっていたことが知られるし、また、日本や琉球の遺跡からは徳化窯白瓷が出土しないことからわかるように、同じ福建商人でも徳

化窯に近い泉州港とやや離れた福州港では拠点する商人組織が異なっていた可能性が高い。しかしながら、明清の漢語史料ならともかく、宋元の漢語史料には商人の出身地に関する具体的な情報は何れも皆無である。したがって、同じ漢人商人であっても、地域ごとどのような商人組織があつてどのような地域との通交を担っていたのかという問題は、海域アジア各地の出土陶器を調査して、その生産地や組成を丹念に整理してゆくしか、解明する方法はないであろう。その意味でも、本書の徳留論考の成果につづくさらなる研究の進展を期待したい。

さて、もう一方の元代ムスリム＝ディアスポラであるが、これはイスラーム諸国から直接世界中に拡散したディアスポラではなく、モンゴル帝国の覇権に伴い、主にイラン・中央アジアをはじめとする東方イスラーム世界から中国に移住したムスリムたちがモンゴル政権の庇護のもと一三〇一―一四世紀の元朝下中国社会を拠点として海域アジア各地に拡散した状況を指している。かかる状況において、中国陶器もまた西方海域アジア、すなわち、インド洋西海域からペルシャ湾・紅海、さらには地中海西沿岸にまで流通した。ただし、このような中国陶器流通の西方拡大は元代が初めてだったわけではなく、唐宋から北宋初期にかけての越窯青瓷・河南系白瓷・長沙窯陶器の流通拡大が第一のピー

クであり、元代の龍泉窯青瓷・景德鎮・德化窯白瓷・福建系陶器・褐釉陶器の流通拡大が第二のピークであったと考えられる<sup>22</sup>。二〇〇八年から二〇一六年にかけて森達也・アリー＝バフラーニプールと共に調査をおこなった旧ホルムズ王国遺跡群のうち、古ホルムズの丘遺跡とK一〇三遺跡では散布する陶器片の年代が南宋末から元代前期、すなわち、一三世紀後半代のみと非常に限られた時代だけの中国陶器片の散布が見られる。元代にはインド洋貿易の主導権を握っていたキーンシュ王国と並んでホルムズ王国との通交が盛んであつたことも文献資料から確認することができ。すなわち、これらの遺跡からの中国陶器の特徴的な出土傾向はイスラーム商人（ホルムズ商人）を介した元朝とホルムズ王国の商業的な紐帯の結果であると考えられるのである。近年、校訂が刊行されて内容が明らかになったイェメン・ラースール朝の行政文書集成である『知識の光』(The Light of Knowledge)に含まれるアデン港関税品目一覧には、輸入された中国陶器器も含まれているが、その品目の名称と分類は漢語ベースではなく明らかにアラビア語によるものである。すなわち、或る程度イスラーム商人が主体的に中国陶器の輸入をおこなっていたことを意味する。これは、漢人商人が主たる担い手となっていた日本を含む海域アジア東部とは明らかに異なる事象であり、この中国とイスラーム



ム世界の直接的な紐帯は一三〇一四世紀の特徴的な様相のひとつと言えるのではないだろうか。

#### 四 モンゴルの覇権と文化交流…イスラームを中心に

ユーラシア全域に及ぶモンゴルの覇権の影響は短期的インパクトのみならず、長期的なインパクトとなって経済・文化の交流を増大させた。しかし、諫早論考が述べるように、その相互影響と定着（順化）は単純ではない。ましてや、支配者であったモンゴルの遊牧文化がそのまま地域に伝播して影響を与えたわけではない。もちろん、モンゴル自身の文化も支配地域の文化と接触・融合してインパクトを与えた側面も否定はできないが、「パクス・モンゴリカ」に象徴される文化交流で東西ユーラシア間で相互に大きなインパクトを与えたのは、むしろ中国の漢文化とイランのイスラーム文化に拠るところが大きかった。それは、諫早論考が扱っている天文学と暦法においても同様であり、その意味でそこで提示された問題は示唆的である。しかし、また、授時暦が内美的にはイスラーム暦法の影響をさほど受けていなかったと指摘されるように、必ずしも異文化同士が等しく融合したわけではなかった。特に、元朝といえども国家制度レベルにおいては西方から伝来したイ

スラーム文化が単純に取り込まれたわけではない。それは、やはり元朝がモンゴル帝国を継承しつつも、一面では中国王朝の側面を持っていたことと無関係ではないだろう。フビライが帝都を大都・上都に定めて伝統中国的な官僚機構を伴う支配体制を敷いたことはモンゴル帝国にとって極めて大きな転換点であった。それは、イランや中央アジア出身のイスラーム教徒を財務系の高級官僚や宰相に多く登用しながらも、文書行政自体は漢語とモンゴル語の二言語を主軸とせざるを得なかった点にも反映されている。ペルシア語も文書行政の一部に採用はされているものの、あくまでも補助的な範囲を出ることはなかった<sup>23</sup>。元朝の統治体制を見ると、アフマド・フアナーカティールやサンガウイグリーなど色目人系宰相や財務官僚が主導して行政機構が肥大した重商主義期とそれに対する反動により漢人宰相が主導権を握って行政機構が縮小する重農主義期が交互に見られる傾向があるが、色目人宰相が専権を握った時期であっても財政関連以外において非漢人文化が漢文化的な制度に代わって席卷することはなかった。それは、モンゴルのイデオロギーのみに起因するわけではなく、例え政策集団となる皇帝の取り巻きをモンゴル人や色目人が占めたとしても、膨大な数の漢人官吏や胥吏を行政機構に内包し、その官吏胥吏たちが中国社会を基盤としていた以上、当然のこ

とである。

加えて、支配者層であるモンゴル人は数の上では少数派であり、かつ、それぞれの支配地域の統治原則として現地の伝統的な統治技術の提要进行を認めていた。テングリ（天）に基づくモンゴルの伝統的世界観は、その単純性・包括性から柔軟な融和性を持ち、様々な信仰・宗教に仮託することが可能であった。そのため、モンゴル帝国初期には様々な宗教教団が帝国の中枢に接近を試み、その庇護を争った結果、モンケ朝とフビライ朝で宗教論争が開催されてい<sup>26</sup>る。そのような状況下で、イスラーム文化は仏教・道教に較べると少数派であり、元朝下の中国では多数派になることはなかった。

それにもかかわらず、イスラーム文化が元朝期の中国に与えたインパクトは決して小さなものではない。イスラームの伝播が短期的に中国社会に劇的な変容をもたらしたり、国家制度を一変させるようなことはなかったとはいえず、徐々に、着実に中国社会に浸透していった。南海貿易（インド洋貿易）において主導的な役割を果たしたのはやはりムスリム商人であったし、陶瓷器貿易に象徴されるように、彼ら自身の手によって中国産品をイスラーム圏にもたらす流通網も確立されていた<sup>26</sup>。このような経済活動に伴う社会へのインパクトは、外交や軍事行動に伴う短期的インパク

トと較べると長期的であったといえる。諫早が紹介する「翻訳と順化のパラダイム」の論理において、「翻訳」は同時並行的に進行したとしても、「順化」のプロセスはより長い時間を要したはずである。そこで第一のインパクトと呼ばれる仏教文化と第三のインパクトと呼ばれるヨーロッパ文化もまた長い時間をかけて中国社会に順化している。イスラーム文化の中国社会への順化を判断するためには、元朝の支配期間をもつてしても果たして十分と言えるだろうか。

イスラーム文化の順化は元に代わって明朝が成立した後もなお続いていた。明朝初期は元朝を凌ぐほどの文化の多様性を持った時代であった。特に永楽朝においてそれはピークに達した。初期の明朝はモンゴル帝国の開放的な国際性を明らかに継承していたのである。例えば、中国側の漢語史料には明言されていないものの、ペルシア語史料にはティムール朝のシャー・ロフの使節団が訪れた永楽朝の朝廷に数カ国語を操る翻訳官の長官アミール・ハッジー・ユースフ・カーディーが権力を握っていたという記録が残されている<sup>27</sup>。このアミール・ハッジーに対して成祖（永楽帝）が発給した勅諭が中国各地の清真寺に石刻として残されているが、これらの石刻の元は揚州から出土した永楽五年の勅諭文書であったと見られる<sup>28</sup>。また、インド洋に派遣



された艦隊を率いた鄭和がムスリムであり、鄭和艦隊の一部がハッジ（メッカ巡礼）を果たしたことは漢語史料側に記録が残っていることから広く知られているが、これに対して家島彦一はアラビア語史料の側からも明朝の使節団を乗せたジャンク船がメッカを訪れたことを明らかにしている<sup>④</sup>。このような元朝の開放性を受け継いだ明朝の対外姿勢は宣宗（宣德帝）の治世まで続いたが、その後、閉鎖的な姿勢への転換がはかられ、イスラーム圏との積極的な交流は断たれることになった。以降、中国国内のイスラーム教徒はイスラーム圏との直接の接触が無いまま独自の発展を遂げることになる。このように見てみると、中国におけるイスラームの「順化」における画期は元明の政権交代ではなく、むしろ、明朝朝廷のイデオロギーの転換にあったことは明らかであろう。

## 五 おわりに：世界史という視点からの展望

モンゴル帝国時代のユーラシア世界史、いわゆる「モンゴル時代史」には様々な側面があり、近年はその中に「海域アジア史」も含まれるという認識が一般的である。もともと海域アジア史は国家・地域ごとの縦割りの個別史、或いは王朝・政権ごとの断代史による弊害を打破すべく国境

や王朝にとらわれない視座からアジア史を捉える枠組みとして提唱された経緯がある。しかし、その枠組内におけるパワーバランスや人・モノの流れは当然ながら均一ではなく、また、歴史学全体が抱える問題でもあるが、立脚点や着目する因子によって歴史事象の持つ様相や意味が異なってくる。現に、高銀美の論じた日元貿易においては、一三世紀後半は中国側の王朝交替と戦役によって一時的な停滞期と見られており、海域アジアで活況を呈していたという南海貿易とは様相を異にする。一三〜一四世紀の海域アジアといっても、立脚点を東南アジアに置くか、モンゴル帝国に置くか、或いは中国に置くかによってその歴史像には違いが生じてくる。例えば、ジェフ・ウェイドラによって提唱された「早期通商の時代」Early Age of Commerce論は一四世紀を「早期通商の時代」と「通商の時代」の谷間と見なし、その時期の海上貿易の停滞を主張する<sup>⑤</sup>。これは一三〜一四世紀の海上貿易が全盛を迎えたとするモンゴル帝国⇨元朝期の海域アジア史の見解と完全に矛盾する。もともと、ウェイドをはじめとする同様の論考は貿易品の流通における時間的なズレや文献史料の残存状況の時代格差を考慮に入れておらず、遊牧民の軍事的拡大に対する蛮族的イメーজと社会の衰退を根拠無く同列に論じるなど、その論に素直に従うことはできないが、東南アジアに

即して東西海上交易を見た場合、たとえ、元朝下の中国とイスラーム圏の間で活発な交易がおこなわれていたとしても、東南アジアが単なる通過点に過ぎなければ、それは交易の時代の「谷間」ということになってしまいかもしれない<sup>(33)</sup>。この問題を別の角度から取り上げたのが深見純生であり、一三〇一四世紀の海上貿易の繁栄における東南アジアの位置づけに対して「通路か、拠点か」という問いかけをおこなっている。このほかにも、桃木論考ではいくつかの分水嶺Ⅱ時代画期に関わる試論が提示されているが、近年最も注目されたのは、リーバーマンの議論に代表される「一四世紀の危機」論である<sup>(35)</sup>。ただし、この論自体は海城アジアと「直接」関わるわけではない。リーバーマンはグローバル・ヒストリーの観点からアジアとの関連を主張し、セデスやウォルタースらの時代区分論との連動も提唱されるものの、「一四世紀の危機」論の本来の対象地域はあくまでもヨーロッパである。ユーラシア規模の季候の寒冷化や黒死病の発生源などの観点からアジアとの関連性が取り上げられることに異論はないが、「危機」の対象範囲が自明的な現象として検証無くアジアにまで敷衍されることは避けるべきではないだろうか。そのためには、まず桃木論考に示されるいくつかの論点を東南アジア史のみならず、ユーラシア史・中国史・モンゴル史などの立場から検

証することが必要であろう。その上で一三〇一四世紀という時代を考えてみなければならぬ。今回の特集に寄せられた論に拠るならば、高銀美の取り上げた元朝の貿易政策の中における日元貿易の特殊性、徳留大輔の指摘した海域アジア全域における中国陶磁器流通の時代的変容、諫早庸一の説く異文化の翻訳と順化の非対称性・不均等性(私はさらに順化の過程における比較的長期にわたる時間的なズレも生じたと考える)はいずれも、一三〇一四世紀の人・モノ・文化の移動と交流が或る意味画期的な様相を見せてながらも、それが単純な分水嶺ではなく、偏差やズレを伴った時代的・地域的な相関性・連続性をも有していることを示してくれている。

本特集のテーマは「一三〇一四世紀はアジアの分水嶺か?」という問いかけであって、断定ではない。この問いかけに対する答えが提示されたのかと言われれば、答えはまだ出ていないと返答せざるを得ない。本特集の目的はマクロな時代区分を提示することよりも、むしろ、時代区分を前提とした議論を脱して異なる立場から相互に問題点を明確化することにある。その目的を達することができたとはどうてい言えないが、本特集を足がかりとして、今後さらに議論が深められれば幸いである。

## 史料

宋濂等『元史』二一〇卷、百訥本（明洪武刊本）  
蘇天爵『国朝文類』七〇卷、四部叢刊初編（元刊本）  
馬歡『瀛涯勝覽』紀錄彙編（景明刊本）  
ハラホト文書（黒水城文書）：塔拉、杜建录、高国祥（編）  
二〇〇八『中国藏黒水城汉文文献』一〇冊、国家图书馆  
出版社。

Anonymous. 2003. *Nūr al-Ma'ārif fī Nuẓum wa Qawānīn wa A'rāf al-Yaman fī al-'Ahd al-Muẓaffarī al-Wārif (Lumière de la connaissance: Règles, lois et coutumes du Yémen sous le règne du sultan rasoulide al-Muẓaffar)*. (『知識の光』) : vol. 1, ed. Muhammad 'Abd al-Rahīm Jāzim. Sana'a: Centre Français d'Archéologie et de Sciences Sociales de Sanaa.

Hāfiẓ Abū. 1380AHS/2001-02. *Zubdat al-Tawārīkh*. (『フフス』) : アブールー『歴史の精髓』 : 4 vols. ed. Sayyid Kamal Ḥaj Sayyid Jawādī. Tihān: Wizārat-i-Farhang wa Irshād-i-Islāmī.  
al-Maqrīzī, Taqī al-Dīn Aḥmad bn 'Alī. 1392AH/1972. *Kitāb al-Sulūk li-Ma'rifa Duwal al-Mulūk*. (『王国の知識のための事績の書』) ed. Sayyid 'Abd al-Fataḥ 'Ashūr. Qāhira: Maḥabā' Dār al-Kutub.

Wasṣaf al-Hadrat (Shihāb al-Dīn 'Abd Allāh b. 'Izz al-Dīn Shīrāzī). 1853. *Kitāb-i-Waṣṣaf al-Hadrat dar ahwāl-i-salāṭīn-i-*

史苑（第七九卷第二号）

*Mughni (Ta'rikh-i-Wassaf)*. (ワッサーフ『ワッサーフ史』) ed. M. M. Isfahānī. Bombay 1269 (rep. in Tihān: Ibn Sīnā, 1338 AHS./1959).

Marco Polo. *Le Devisement dou Monde* (『マルコ・ポーロ 世界の記述』)

-Marco/Benedetto. Ed. Luigi Foscolo Benedetto, *il Milione: Prima Edizione Integrale*. Firenze, 1928.

-Marco/Ramusio. 1980. Ed. Giovanni Battista Ramusio, *I viaggi di Marco Polo*. In *Navigazioni e viaggi*. vol.3, Venezia. 1559 (re-ed. Giulio Einaudi, Torino, 1980.)

-『マルコ／愛宕』：〔訳注〕愛宕松男『東方見聞録』二卷、東洋文庫、平凡社、一九七〇。

## 参考文献

石黒ひろ子二〇一八「墨書陶磁器からみた「綱」』『南島史学』八六、二〇三〜一八六頁。

石黒ひろ子二〇一九「経筒にみえる宋人銘墨書と「綱首」——広東省南華寺出土五百羅漢銘文「広州綱首」をめぐる』『岩手大学平泉研究センター年報』七集、二九〜四三頁。

榎本涉二〇〇一「日本遠征以後における元朝の倭船対策」『日本史研究』四七〇号、五八〜八二頁

モンゴル帝国Ⅱ元朝の覇権から見た一三〇一―一四世紀の諸相(四日市)

榎本涉二〇〇六「初期日元貿易と人的交流」宋代史研究会編『宋代の長江流域——社会経済史の視点から』東京・汲古書院

榎本涉二〇一四「宋元交替と日本」『岩波講座 日本歴史

第七巻 中世2』東京・岩波書店、七七―一二二頁。

亀井明德二〇一五『博多唐房の研究』東京・亜州古陶瓷学会。

川添昭二一九八七「鎌倉中期の対外関係と博多——承天寺の開創と博多綱首謝国明」『九州史学』八八―九〇号、一三一―一五五頁。

川添昭二一九八八「鎌倉初期の対外関係と博多」節内健次(編)『鎖国日本と国際交流』上、東京・吉川弘文館

川添昭二一九九〇「南北朝期博多文化の展開と対外関係」

『地域における国際化の歴史的展開に関する総合研究——九州地域における』平成元年度科学研究費補助金研究成果報告書(総合研究(A)) 四三―六六頁。

川添昭二一九九三「鎌倉末期の対外関係と博多——新安沈没船木簡・東福寺・承天寺」大隅和雄(編)『鎌倉時代文化伝播の研究』東京・吉川弘文館、三〇―三三〇頁。

佐々木花江・佐々木達夫二〇〇二「ペルシア湾北岸遺跡

と採集陶磁器」『金沢大学考古学紀要』二六号、二七―四七頁。

杉山正明一九九五『クビライの挑戦——モンゴル海上帝国への道』東京・朝日新聞社。

田中克子二〇〇二「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁(その二)福建省江流域、及び以北における窯跡出土陶磁」『博多研究会誌』一〇号、三三―五五頁。

田中克子二〇〇三「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁(その三) 宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』一一号、一―二〇頁。

田中克子二〇〇九「生産と流通」木下尚子(編)『13―14世紀の琉球と福建』13―14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究——中国福建省を中心に』熊本・熊本大学木下尚子研究室、一三七―一四三頁。

徳留大輔二〇一三「日本出土の中国産青磁の動向」龍泉窯系青磁を中心に』『平泉文化研究センター年報』一号、一九―二七頁。

中村淳二一九九四「モンゴル時代の「道仏論争」の実像——クビライの中国支配への道」『東洋学報』七五号三巻、二二九―二五九頁。

中村翼二〇一三「日元貿易期の海商と鎌倉・室町幕府——寺社造営料唐船の歴史的的位置」『ヒストリア』二四一号、

九三〇～二〇頁。

深見純生二〇〇四「元代のマラッカ海峡——通路か拠点か」『東南アジア…歴史と文化』三三三号、一〇〇〇～一一九頁。

三上次男一九六三「中世の中東ならびに南アジアにおける中国陶磁——東西交渉史の一側面」『オリエンツ』六号二巻、一〇二五、三九頁。

村井章介二〇一三a「日元交通と禅律文化」『日本中世の異文化接触』東京：東京大学出版会：一七一～二一五頁（原載：『日本の時代史10 南北朝の動乱』東京：吉川弘文館、二〇〇三）。

村井章介二〇一三b「寺社造営料唐船を見直す——貿易・文化交流・沈船」『日本中世の異文化接触』東京：東京大学出版会、二四一～二七二頁。

森克己一九七五『森克己著作集第二巻 続日宋貿易の研究』東京：国書刊行会。

森達也二〇〇四「磁州窯系陶器生産地の分布と系譜」『東洋陶磁』三三三。

森達也二〇一五『中国青瓷の研究——編年と流通』東京：汲古書院。

森本朝子二〇〇九「東南アジアにおける14世紀前後の福建陶磁…インドネシア・マレーシア・フィリピンの遺

史苑（第七九巻第二号）

跡の出土遺物」木下尚子（編）『13～14世紀の琉球と福建…13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究——中国福建省を中心に』熊本：熊本大学木下尚子研究室、一五五～一八八頁。

劉新園、（訳）岡佳子・田中美佐一九八三「元代青花の特異紋飾と将作院所属の浮梁磁局及び画局」『貿易陶磁研究』三三三、一一〇～一二九頁。

家島彦一 一九六六「イスラーム史料中に見る鄭和遠征記事について」『史学』三八号四巻、九五～一〇一頁。

家島彦一 一九六八「15世紀におけるインド洋通商史の一齣——鄭和遠征分隊のイエメン訪問について」『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究』一号、一三七～一五五頁。

四日市康博二〇〇〇「元朝宮廷における交易と廷臣集団」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四五号四巻、三〇～三五頁。

四日市康博二〇一一「近年のユーラシア史研究と貿易陶磁」『貿易陶磁研究』三三三、一〇～一三三頁。

陈达生 一九八四《泉州伊斯兰教石刻》福州：宁夏人民出版社・福建人民出版社。

陈信雄 一九八五《澎湖宋元陶瓷》澎湖：澎湖县立文化中心。

モンゴル帝国Ⅱ元朝の覇権から見た一三〇一四世紀の諸相(四日市)

陈育宁·汤晓芳 二〇〇八《中国回族文物》银川：宁夏人民出版社。

廖大珂 一九九三《略论宋元时期的纲首》《海交史研究》

一九九三年二期、五〇—五二页。

刘新园 一九八三《元青花特异纹饰和将作院所属浮梁磁局与画局》『贸易陶磁研究』三期、一〇—一〇页。

刘中玉 二〇一八《14世纪蒙古体系变动下的青花瓷——

元青花与伊利汗国伊斯兰转向关系梳论》《形象史学》二〇一七上半年期、一八〇—二〇五页。

劉韋廷 二〇一六《元代佛道辯證探微：以《大元至辯偽錄》為主之討論》《輔仁宗教研究》三三期、四一—七〇頁。

陆明华 二〇〇五《元代景德镇官窑瓷烧造及相关问题研究》

《上海博物馆集刊》一〇期、一九七—二〇九页。

陆明华 二〇〇八《元明景德镇进口青花料研究》《上海博物馆集刊》一期、二五〇—二六四页。

罗贤佑 一九九一《论元代畏兀儿人桑哥与楔哲笃的理财活动》《民族研究》一九九一年六期、一〇二—一〇九页。

毛海明 二〇一六《桑哥輔政碑事件探微——以翰林官僚張之翰的仕宦轉折為線索》《中央研究院歷史語言研究所集刊》八七·三期、六一—六六七頁。

仁庆扎西 一九八四《元代中央王朝中的藏族宰相桑哥》《西藏研究》一九八四年二期、五三—五九页。

尚衍斌、林欢 二〇〇八《重回青：的来龙去脉》《紫禁城》

一六一期、一四四—一四九页。

森达也 二〇〇八《伊朗波斯湾北岸几个海港遗迹发现的中国陶瓷》中国古陶瓷学会「编」《中国古陶瓷研究 第十四辑》紫禁城出版社、四一四—四四二页。

四日市康博·エマード・ウッド・イン・シヤイフル・ホキヤ  
マ・イー 二〇一二《黑水城出土官文书中的波斯文再考》元代国家与社会国际学术研讨会·天津：南开大学、

二〇一二年八月二五日。

王頌 一九八一《斂財」之臣与元世祖——试论阿合马等的「理财」及其与忽必烈的关系》《元史及北方民族史研究集刊》五期、六〇—六九页。

吴文良 二〇〇五《泉州宗教石刻(增订本)》北京：科学出版社。

杨德华 一九九五《元代藏族宰相桑哥理财的政绩》《中国藏学》一九九五年四期、六四—六九页。

余振贵·雷晓静 二〇〇一《中国回族金石录》银川：宁夏人民出版社。

张敏 二〇一二《论浮梁瓷局在元代景德镇瓷业中的地位与作用》《中国陶瓷》四八·三期、三五—三六页。

张云江 二〇一四《至元一八年焚毁道经事考辨》《世界宗教研究》二〇一四年四期、六六—七三页。



- 문화재관리국 문화재본부 문화재관리국 一九八一〜一九八八 『新安海底遺物(新安海底遺物)』資料編Ⅰ〜Ⅲ・綜合編' 서울·문화재관리국 문화재본부 문화재관리국.
- 국립해양문화재연구소 二〇一〇 『백안대너 2번진 : 수중발굴조사 보고서 = Taean Mado shipwreck no.2 : underwater excavation 泰安馬島 2號船 : 水中發掘調査報告書』 목포 : 문화재청, 국립해양문화재연구소.
- Gyllensvärd. 1973. "Recent Finds of Chinese Ceramics at Fostat. I." *The Museum of Far Eastern Antiquities (Östasiatiska Museet) Stockholm Bulletin* 45: 91-119.
- Gyllensvärd. 1975. "Recent Finds of Chinese Ceramics at Fostat. II." *The Museum of Far Eastern Antiquities (Östasiatiska Museet) Stockholm Bulletin* 47: 93-117.
- Wade, Geoff. 2009. "An Early Age of Commerce in Southeast Asia, 900-1300CE." *Journal of Southeast Asian Studies* 40/2: 221-65.
- McKinnon, E. Edwards. 1977. "Research at Kota Cina, a Sung-Yüan period trading site in East Sumatra." *Archipel* 14: 19-32.

- McKinnon, E. Edwards. 1984. *Kota Cina: Its Context and Meaning in the Trade of Southeast Asia in the Twelfth to Fourteenth Centuries*. Ph.D thesis. Ithaca: Cornell University.
- Milner, A. C., E. Edwards McKinnon and Tengku Luckman Sinar S. H. 1978. "A Note on Aru and Kota Cina." *Indonesia* 26: 1-42.
- Southeast Asian Ceramic Society 1985. *A Ceramic Legacy of Asia's Maritime Trade: Song Dynasty Guangdong Wares and other 11th-19th century Trade Ceramics found on Tioman Island, Malaysia*. Selangor: Southeast Asian Ceramic Society, Oxford U.P.
- Lieberman, Victor B. 2003. *Strange Parallels Southeast Asia in Global Context, c. 800-1830. Volume 1: Omegration on the Mainland*. New Ypk: Cambridge University Press.
- Yokkaichi Yasuhiro. 2009. "Chinese and Muslim Diasporas and the Indian Ocean Trade Network under Mongol Hegemony." (ed.) Angela Schottenhammer. *The East Asian "Mediterranean": Maritime Crossroads of Culture, Commerce and Human Migration*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Yokkaichi Yasuhiro. 2019. "The Maritime and Continental

モンゴル帝国Ⅱ元朝の覇権から見た一三〇一四世紀の諸相(四日市)

Networks of Kish Merchants under Mongol Rule: The Role of the Indian Ocean, Fars and Iraq.” *Journal of Economic and Social History of the Orient* 62: 428-63.

註

- (1) ただし、元代以前の漢語史料に見える「琉求」は琉求王国、すなわち、現在に沖縄ではなく、台湾であったと見られている。
- (2) 橋本雄二〇〇七・榎本涉二〇一四。
- (3) 榎本二〇〇六。
- (4) 榎本二〇〇一・榎本二〇一四。
- (5) 元朝期の日元貿易は僧侶の往来と密接な関係を有しており、日元間の貿易船の往来が絶頂を迎えた一四世紀に對して村井章介は「渡來僧の世紀」と呼んでいる。cf. 村井一九九八。
- (6) 민화재관리부 민화공부부민화재관리국 一九八一〜一九八八。
- (7) 廖大珂一九九三・石黒二〇一八・石黒二〇一九。
- (8) 例えば、南インドのパーンディア朝ではイスラーム地域からの馬輸入に際して、国庫からではなく仏教寺院の資本が王からイスラーム商人に支払われていたことが記録されている(Wassaf/Bombay, 302)。また、イランではホルムズ商人のインド洋貿易、特に中国との貿易においてカーゼルーン教団やダーニヤール教団などのスーフイー教団が資金的なバトロンとして存在していたことが知られる(cf. Yokkachi 2019)。
- (9) 網については注7を参照。
- (10) Southeast Asian Ceramic Society 1985; 陳一九八五; 민화재 30마하주관서신 二〇一四。
- (11) この時期の青瓷の国際流通状況に関しては、徳留二〇一三; 森二〇一五を参照。

- (12) 田中二〇〇二; 田中二〇〇三; 田中二〇〇九。  
 (13) 森本二〇〇九。  
 (14) 調査成果の一部は Yokkaichi 2019 を参照。  
 (15) 浮梁磁局については『元史』巻八八、百官志四・劉一九八三; 劉一九八三; 陸二〇〇五; 張敏二〇一二を参照。  
 (16) 回回書については、陸二〇〇八、二五五〜五六頁; 尚林二〇〇八、一四四〜四九頁; 劉二〇一八、二〇〇〜二頁を参照。なお、近年、整理されたハラホト漢語文書断片にも「回回書」の文字が見られ、内陸の交易ルートを通じて中国にもたらされたことが確認できる。ハラホト(黒水城)文書 MI-1048 [84H-F11:W33/111] (塔二〇〇八、巻六、一三〇七頁) 四日市二〇一、九頁を参照。  
 (17) 森二〇〇四。  
 (18) 唐坊と居留していた唐商人と海上貿易の関係については、川添一九八七; 川添一九八八; 川添一九九〇; 川添一九九三; 村井二〇一三 a; 村井二〇一三 b; 中村二〇一三; 亀井二〇一五などを参照。  
 (19) McKinnon 1977; Milner, McKinnon and Tengku 1978, 1-42; Makinnon 1984。  
 (20) 森一九七五、二四九〜二五三頁。  
 (21) 詳細は、Yokkaichi 2009 を参照。  
 (22) 三上一九六三; Gyllensvärd 1973; Gyllensvärd 1975; 佐々木・佐々木二〇〇二; 森二〇〇八; Yokkaichi 2009 を参照。  
 (23) この点に関しては、四日市・エマード・ウツディーン二〇一二として口頭発表した論文は未刊行である。  
 (24) 『元史』巻一六〇、閻復伝; 巻一六九、張九思伝; 巻二〇五、姦臣伝、阿合馬、盧世榮、桑哥; 『国朝文類』巻

- 二四、元明善(撰)、丞相東平忠憲王碑。  
 (25) 憲宗モンケ朝・世祖フビライ朝の宗教論争(道仏論争)については中村一九九四; 張二〇一四; 劉二〇一六を参照。  
 (26) Yokkaichi 2019。  
 (27) Zuhdat al-Tawarikh, 839-43。  
 (28) 泉州・清浄寺・福州・清真寺に米里哈只(アミール・ハッジー)宛永樂五年勅諭、蘇州・太平坊清真寺に米里閃思丁(アミール・シヤムス・ウツディーン)宛永樂五年勅諭、西安・化覺巷清真寺、松江・清真寺に賽亦的哈馬魯丁(サイイド・カマル・ウツディーン)宛勅諭が現存する(全て筆者が現地で見見)。書籍・論文に掲載された情報としては、陳一九八四、七〜八頁、図一八〜二〇; 余・雷二〇〇一、二〇二頁; 吳二〇〇五、二七頁; 陳・湯二〇〇八、三五一〜五三頁などを参照。  
 (29) 上述の石刻の原文であったと見られる漢語・ペルシア語・モンゴル語合璧文書が一九五六年に揚州の普哈丁陵墓園から出土し、北京の民族文化宮に所蔵されたと陳達生は伝えている(陳一九八四、八頁)。しかし、現在、民族文化宮では当該文書は行方不明であり、2010年に筆者が調査をおこなった際にも見つからなかった。  
 (30) 『瀛涯勝覽』天方国  
 (31) Magrizi, Suluk, 4-2: 872-3; 家島一九六六、九五〜一〇二頁; 家島一九六八、一四六〜四八頁。  
 (32) Wade 2009。  
 (33) もっとも、ウエイドらの議論は東南アジア諸国の状況よりもむしろ中国側からのプッシュ要因を重視している傾向が強いので、それでも同意は難しい。

モンゴル帝国＝元朝の覇権から見た一三～一四世紀の諸相（四日市）

(34) 深見二〇〇四。ただし、深見はこの問題に対する結論は示していない。ちなみに深見論文には元朝の海域支配に関する誤解が散見する。例えば、宋代以降の海外交易活動が元代になって国家に取り込まれたかのような見解を示しているが（二〇四頁）、「綱」と呼ばれる官貿易請負組織は宋代から元代まで継続している。元代になって交易構造が劇的かつ急激に国家支配体制に変化したという認識は誤りである。元朝の中央政府が主体的に南海諸国を招撫したとされるが（二〇四～五頁）、ハルガスン（コルゴスン／和礼霍孫）は翰林院のトップとして受動的に外国使節に應對しただけで、むしろ重商的な南海貿易振興に否定的であった（四日市二〇〇〇）。また、インド洋が大元ウルス艦隊の海となり、主要港湾都市に元朝の貿易事務官が駐在したという杉山正明の論（杉山一九九五）を紹介しているが（ただし、後者に関しては深見も疑問を呈している（二〇五頁））、杉山の言うようなことを示す根拠も史料も存在せず、事実とは言えない。元朝がラムリー（南巫里）、サムドラ（速木都刺）など北スマトラ諸国に使者を派遣して服従させたというが、『元史』亦黒迷失伝にある記事は「先ず郝成、劉淵を遣わし、論して南巫里、速木都刺、不魯不都、八刺刺諸小国を降らしめんとす」と読み、実際に服従したわけではない。また、この「降」は「朝貢に赴いた」くらいの意味で実効支配を意味しない。マルコ・ポーロのいう「インド」は必ずしも現在のインドのみを指すわけではなく、時に「アジア」とほぼ同義で使用される場合があるので注意が必要である。マルコは本来のインドを「大インド」Endie greignor / India maggior、東南アジアを「小インド」memor Yndie / India minore、アフリカ東部

を「中インド」meçane Yndie / India seconda overo meçanaとも呼んでいる（Marco/Benedetto, 209; Marco/Ramusio, 289; マルコ／愛宕君、二四四～四五）。

(35) Lieberman 2003.

（本学文学部准教授）